

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2004年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	異文化コミュニケーション 研究科	異文化コミュニケーション 専攻
指導教員	所属・職名	氏 名	
	大学院異文化コミュニケーション研究科・教授	水野的	印
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題	通訳・翻訳における訳語選択の認知メカニズム		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科・異文化コミュニケーション専攻・前期課程1年	河原清志	印
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
研究期間	2004 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は通訳・翻訳の実務において、どういう認知的なメカニズムが作用することによって適切な訳語ないし訳文が目標言語として産出されるのかを、認知意味論をベースに考察したものである。多義語と言われている語の項目を英和辞典で見ると、語義が複数掲載されているが、具体的な文脈の中でいったいどういう処理を施すことによって語義が特定されるのか、また辞書には載っていない語義がなぜ選択可能なのかについて、本研究で分析を試みた。そして、本研究は実務家養成のための教育プログラム・カリキュラム開発、英語学習者のための教育プログラムへと応用することも射程に入れたものである。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[認知意味論] [多義語] [コア理論]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究報告者である河原は長年、英語教育に携わり本格的な英語教育のあり方を模索してきた。その中で語彙・文法の理論装置として認知言語学のなかの認知意味論で慶応大学教授・田中茂範氏が提唱しているコア理論を基盤にして、具体的な英語教育のあり方を開発してきた。と同時に、通訳・翻訳養成法を英語教育に応用した英語教育のあり方も開発してきた。そこで本研究によって、これら 2 分野がうまく融合される形で、コア理論の通訳・翻訳実践への応用および通訳・翻訳教授法への応用を具体化することができた。

まず、本研究の具体的な成果としては、まず通訳・翻訳の訳語選択の認知メカニズム研究として、①河原清志(鶴田知佳子、佐藤芳明との共同執筆)「通訳における訳語選択の理論と実際」、日本通訳学会編学会編『通訳研究』、第4号、2004年、15-40 ページがある。この論文を執筆するに当たり、鶴田知佳子、佐藤芳明と「通訳現場での訳語選択の実践と理論」(日本通訳学会第13回例会、2004年8月1日、立教大学)を共同発表した。

本論文は、英語における多義語の意味の特定(disambiguation)が認知プロセスの中でどのように処理され、さらに多義語の意味の特定がなされたあとの日本語の選択がどのようになされるか、という 2 つの側面に関して、前者に焦点を当てて論じたものである。本論文では品詞別の特性に応じた語の意味のあり方について、多義の構造に焦点をあてて理論的な考察を行い、それに基づいて現場での通訳事例について分析を行った。通訳・翻訳の実践や教育において、起点言語における多義語を捉える上で認知操作のメカニズムを意識することの実益は以下のとおりである。

まず、動作動詞と前置詞について妥当する「コア」という理論装置を実践や教育の場に導入すると、これまでは辞書を頼りに 1 対多対応で固定的に記憶していた訳語では文脈上不都合が生じていたような場合でも、コアを押さえおけば柔軟な訳出が可能となる。また、コアを想定することで意味の弾性に適切な絞りをかけることができ、誤訳が防止できる。コア概念により意味世界が如実に捉えられるため、イメージが湧きやすく意味表象がしやすくなるため、柔軟な訳出が可能となる。さらに、必要に応じて逐一辞書の訳語を探し読みするという従来の方法とは異なり、コアを基に自分で自由に訳語選択ができる状態になるので、訳語選択の自己モニターもコアに遡って瞬時に行うことができ、特に同時通訳のような時間的制約がある時の処理にも有効である。

また、「投射」「焦点化」「図式融合」といった多義派生原理を導入する実益を動作動詞と前置詞について見てゆくと、まず頭の中で獲得された抽象的なコアを文脈に合わせて具体的に適用する際の手掛かりを与えてくれ、適切な訳語選択が可能になる。以上述べた動作動詞と前置詞に関する本論文の主張を基にした実践・教育の現場での実益は、他の品詞である名詞や形容詞においても同じく妥当するものである。名詞であれば、動作動詞と前置詞における「コア」に類するものとして、「典型概念」を挙げた。そしてこの典型概念を拠りどころに文脈に応じて「情景投射」「換喩」「文脈調整」などの認知操作を行うことによって、適切な訳語が選択できる。また、形容詞であれば、「コア」に類するものとして、共起する名詞のクラスター分析を通じてその形容詞が持つ中核的意味が抽出され、それを頼りに柔軟な訳出が文脈に応じて可能になることを見てきた。更には、これまでは品詞別に多義の構造を詳らかにし、それぞれの品詞に妥当する多義派生原理に関する認知操作を的確に峻別して論述した研究はなかったが、本論文が試みた品詞別の分析により、各品詞がそれぞれ担っている統語上・意味上の機能の差異に応じたコアないし中核的意味の実相の相違に応じた多義の構造をより深く理解することが可能となり、これらの議論は通訳・翻訳の実践・教育に資するものと考えられ。

次に、訳語を選択する上で目標言語らしさを確保するためのメカニズム研究として、②河原清志(永井那和との共同執筆)「認知言語類型論に基づく英日通訳・翻訳における品詞転換方略の分析」、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科編『異文化コミュニケーション論集』第3号、2005年、81-94 ページがある。この論文を執筆するに当たり、永井那和

研究成果の概要 つづき

と「認知対照言語論から見た通訳・翻訳における品詞転換のテクニック」(日本通訳学会第5回年次大会、2004年9月26日、立教大学)を共同発表した。本論文は、英語における多義語の意味の特定(disambiguation)が認知プロセスの中でどのように処理され、さらに多義語の意味の特定がなされたあとの日本語の選択がどのようになされるか、という2つの側面に関して、後者に焦点を当てて論じたものである。本論文は通訳者や翻訳者が、起点言語(英語)を目標言語(日本語)に変換する際に、意識的であれ無意識的であれ目標言語の発想に逆らわないような、つまり自然な訳語を産出するための方略の一つとして用いている品詞転換を分析対象とし、そのような方略の妥当性や根拠を認知言語類型論に求めたものである。結論として、日本語「らしさ」は以下のようにまとめることができることを確認した。

日本語の場合繰り返し立ち現れてくるのは、輪郭の定かでない記号化(つまり、<無界性>(unboundedness)への指向性)ということである。このことは、<モノ>的な把握と並んで<コト>的な把握(とりわけ、その<変化>の様相における<ナル>的なイメージ・スキーマでの把握)への傾斜が相対的に目立つということばかりでなく、<モノ>的な把握に対する<トコロ>的な把握の相対的な目立ちにも反映されている。そして、そのような<無界性>への指向性は、究極的には、積極的に他者に働きかけ、影響し、変化させるという<動作主>(agent)としての人間という主客対立的なスキーマよりも、受身的に他からの刺戟を感じ取って内在化する<感受者>(sentient)としての人間というスキーマが言語化の過程で根強く働いているということと無関係ではない。つまり、日本語は「無界性」を鍵概念にして特徴づけができ、これが日本語「らしさ」を探る有力な手掛かりになる。

以上の知見は、通訳・翻訳において英語を日本語に訳出するさいの具体的な訳語選択のメカニズム解明に資するものである。

更に、これらの研究を具体的な通訳・翻訳教育に生かすための研究として、③鶴田知佳子と「Incorporation of Cognitive view into Teaching Interpretation — How Translation of Polysemous Basic Words Can Be Taught」(FIT 4th Asian Translators' Forum、2004年10月30日、北京・精華大学)を共同発表した。諸外国での通訳者・翻訳者の研究者が集う国際学会で本研究の成果を発表し、大変よい反響を得た。投稿論文は別途、国際翻訳研究誌に掲載される予定である(詳細は未定)。

そして、以上の研究成果を英語教育に応用したものとして、河原清志(鶴田知佳子との共著)、コスモピア、『同時通訳の最前線から学ぶ ここまで使える超基本単語50』、2004年、240ページがある。

また、諸講演会で本研究を元に一般の方たちに、語の多義性と英語学習、通訳・翻訳学習についてのヒントをわかりやすく説明する試みを行ったところ、大変いい反響を得た。

なお、発表した具体的な成果をご覧いただくため、上記論文2本と著書1冊を添付して本報告書を提出することとする。